

【九州大学大学院芸術工学府 芸術工学専攻（修士課程） 環境設計コース】
（2022年度以降入学者）

1. ディプロマ・ポリシー

教育の目的

芸術工学専攻において養成する人材像は、九州大学教育憲章に定める教育の目的と4つの原則（人間性の原則、社会性の原則、国際性の原則、専門性の原則）を踏まえ、人類が直面する課題に真摯に向き合うため、科学技術と芸術的感性を融合する「技術の人間化」の理念を継承しつつ、「モノ・コト・ビジョン」へ拡大する新しいデザイン領域に対する意識と人文、社会、自然にまたがる広い知識を基盤とする「高次のデザイナー」である。

環境設計とは、人間と環境の共生という理念にたち、人間が過去から受け継ぎ未来へ手渡していく環境の価値を自然と文化の持続性・多様性から学び、未来の地域と生活環境を創造していく営みである。本コースでは、大学・研究所・博物館等の研究職、建築・造園・都市計画・文化振興・環境政策等の行政職、まちづくり・むらおこし等のプランナー、遺産保護・遺産修復等のマネージャー、建築・造園・景観等のデザイナー、建築・造園等のエンジニア等の幅広い職種において、将来のよりよい環境をデザインする担い手として、次のような総合的な研究能力とデザイン能力を備えた人材の育成を目指す。

- 1) 国内外をフィールドとした実践的な教育により、多様な環境の価値評価能力を持ち、環境設計の国際ネットワークを支えることができる。
- 2) 環境の価値を評価し将来へ継承するためにサステナブルな建築・景観・社会システムをデザインする専門性を習得し、環境の維持向上に貢献しうる。
- 3) 人間と環境の関係をふまえたサステナブル・デザインを可能とする安全性・健康性・機能性・快適性を実現するプロセスについて習得し、空間的な調和と時間的な視野を持って技術面から環境設計を支えることができる。

併せて [グローバル・アーキテクト・プログラム] として、国際的建築家資格に準じたカリキュラムを提供し、建築・環境設計に関する工学的知識及び文化芸術に関する知識を備えた、総合的設計能力を有する人材を育成する。

本コースで掲げる教育課程を通して「芸術工学」の基本・基礎を十分に理解しながら到達目標を達成し、実社会において指導的立場を果たし得る能力を修得した者に修士（芸術工学）の学位を授与する。また、アントレプレナーシップやデザイン実務に関する専門知識を修得し、特にデザインとビジネスに関する修士研究に取り組んだ者に修士（デザインストラテジー）を授与する。

参照基準

大学教育の分野別質保証のための教育課程編成上の参照基準

土木工学・建築学分野、地域研究分野、歴史学分野、農学分野

日本技術者認定機構、日本技術者教育認定基準 共通基準、2019

日本技術者認定機構、日本技術者教育認定機構、個別基準、建築系学士修士課程プログラムにおける勘案事項、及び建築設計・計画分野の学士修士課程プログラムに関する分野要件、2019

UNESCO-UIA 建築教育憲章 (UNESCO-UIA Charter for Architectural Education)

学修目標

A. (主体的な学び・協働)

- A-1. 多様化する諸問題に対してデザインに関わる深い専門的知識を背景とし、自ら問題を見出し、創造的・批判的に吟味・検討しながら、幅広い分野の課題に実践的に取り組みことができる能力を有する。また、そのために自主的・継続的に学習を進めることができる。
- A-2. 多様な知の交流を行い、チームの一員として他者と協働し、自らの専門性を発揮しながら問題解決にあたることができる。また論理的な文章表現力、口頭発表能力、及び討議力を持って、効果的に情報を発信し、吸収することができる。

B. (知識・理解)

- B-1. 芸術工学の基盤となる具体的知識や概念、考え方、方法について十分に理解し、コースごとの専門性にとどまらない普遍的なデザインのリテラシー、方法論を説明することができる。
- B-2. 環境を構成する自然と文化の持続性・多様性等の価値評価に関連する知識を理解し、その理論や概念を説明することができる。
- B-3. 環境の価値を評価・保護・継承するための専門性と地域環境の価値となるべき建築・景観・社会システムのデザインに関する知識を理解し、その理論や概念を説明することができる。
- B-4. 人間と環境の関係をふまえたサステナブル・デザインを可能とする安全性・健康性・機能性・快適性を実現する技術に関する知識を理解し、その理論や概念を説明することができる。

C-1. (適用・分析)

- C-1-1 課題解決のために、芸術工学分野の専門的知識を統合して、分析、解釈し、制御あるいは構成することができる。

- C-1-2 フィールド調査、資料調査、データ調査、実験、シミュレーション等を通して必要な情報を収集し、適切な分析を施したうえで、その成果を適用することができる。

C-2. (評価・創造)

- C-2-1 異分野との協働を通して、専門知識を総合的に活用しながら、社会の複合的な課題を提起し、解決のための実践的な方向性を示すことができる。
- C-2-2 「環境」の現状や課題を示す個々の要素の分析から得られた情報を統合し、本質的価値の評価に基づき、生態的・空間的に調和した、過去・現在、将来という時間的な視野から持続可能な環境デザインの計画・設計・提案を行うことができる。

D. (実践)

- D-1. 芸術工学に対する鋭い感性と、他分野との融合も視野に入れた高度な専門的知識を兼ね備え、総合的な設計能力をもって、科学技術と芸術的感性の融合を推進し、グローバルな世界で豊かな生活の実現に貢献することができる。
- D-2. 環境を評価・保全・活用し、未来へ手渡す環境の価値を技術によって向上させ・創生する営みとしての高次のデザイン活動が社会に及ぼす影響を常に考慮しながら、社会に対する責任と倫理観を持って環境デザインに取り組むことができる。
- D-3. 大学・研究所・博物館等の研究職、建築・造園・都市計画・文化振興・環境政策等の行政職、まちづくり・むらおこし等のプランナー、遺産保護・遺産修復等のマネージャー、建築・造園・景観等のデザイナー、建築・造園等のエンジニア等の幅広い職種において、よりよい環境を創造する環境デザイナーとして活躍しようとする事ができる。

2) カリキュラム・ポリシー

ディプロマ・ポリシーを達成するために、別表（カリキュラム・マップ）の通り、教育課程を編成する。

デザインに対する課題は現実社会から発せられるため、ほとんどの場合「分野横断的」である。デザインの営為が社会に対して有効であるためには、デザイン教育も横断的である必要がある。このため、芸術工学専攻内の6つのコースはそれぞれの専門性を深化させる一方で、コース間の障壁を下げて分野横断的な教育実践を可能とするため、少ない必修科目の設定、コース間共通科目の配置、分野横断を推進する科目群の配置、という考えに沿った単位履修制度とした。また特に芸術工学府は、その母体となる芸術工学部と同様に、実験・実習等の演習系科目を通して、自ら体験し、実践することを教育方法の中での重要な方針として

掲げており、教育課程の編成に当たっても、この考え方を継承拡大している。

各コースで開講される科目は、「Ⅰ. デザイン科学系統」、「Ⅱ. デザイン工学系統」、「Ⅲ. 設計・制作系統」、「Ⅳ. 文化・社会デザイン系統」の4系統に分類され、全体を通して総合的なデザイン教育研究を可能にする。この4つの系統は、コースが提供する専門性を縦方向に並べると、これらを貫く「横串」となり、コース間の連携融合のための制度となっている。

系統は以下のように性格づけできる。

- Ⅰ. デザイン科学系統：デザインに関連する物事の原理、仕組みを追求する
- Ⅱ. デザイン工学系統：デザインに関連する技術を開発する
- Ⅲ. 設計・制作系統：具体的な形、仕組み、やり方を作る
- Ⅳ. 文化・社会デザイン系統：デザインに関連する文化・社会のあり方を研究する

これら4つの系統には、それぞれ「講義」、「演習」また「共通」の性格を持つ専門科目が配置される。主として「講義」、「演習」の科目を通して、自らの専門分野にとらわれずに、到達目標 A（主体的な学び・協働）及び B（知識・理解）に対応する項目を修得し、さらに幅広く「共通」の性格を持つ科目によって幅広い領域への関心や意欲、課題に取り組む態度を修得、さらに問題解決のための実践的な能力や技能を修得する。これは到達目標 C-1（適用・分析）・C-2（評価・創造）並びに D（実践）に対応する。

【コースワーク】

環境設計コースでは、文化・社会デザイン系科目に配置される環境人類学特論、設計・制作系の景観生態学特論などの科目を通して多様な環境の諸問題に関して学び（到達目標 A）、デザイン科学系の熱環境学特論や設計・制作系のランドスケープデザイン特論、建築計画特論などの科目で環境設計に必要な知識と理解能力を修得する（到達目標 B）。さらに各系統に配置される演習科目、コース共通の科目であるスタジオプロジェクトや芸術工学演習などを通して、総合的な環境設計に関する能力や技能を（到達目標 C-1, C-2）実践的に修得する（到達目標 D）。

環境設計コースのコア科目としては、以下の講義科目を提供している。

- デザイン科学系統科目：環境化学特論、熱環境学特論
- デザイン工学系統科目：建築構造学特論、環境材料学特論、音響環境学特論、音環境評価特論、環境心理学特論
- 設計・制作系統科目：建築計画特論、建築構法計画特論、環境保全学特論、景観生態学特論、ランドスケープデザイン特論
- 文化・社会デザイン系統科目：日本建築史特論、西洋建築史特論、文化財学特論、国際環境政策特論、環境人類学特論、共生社会デザイン論、環境リスクマネジメント、デザイン哲学、美術史、環境文化特論

□ コース共通演習科目：環境デザインプロジェクト A・B

スタジオプロジェクト科目では建築設計などの学内インターンシップとして機能する内容を提供する。

さらに実践的な人材育成として、グローバル・アーキテクト・プログラムの修了を目指す学生は、学生便覧の記載にあるように演習を中心とするスタジオ科目群からグローバル・アーキテクト・プロジェクトを含む3科目以上、講義を中心とするコア科目群、そして、インターンシップ科目群から規定された単位に相当する科目数の修得を行う。

1級建築士資格の取得を目指すものは、インターンシップ科目として建築設計インターンシップもしくはアーキテクト・インターンシップ I・II など、関連演習科目として環境デザインプロジェクト A など、関連講義科目として建築計画特論、日本建築史特論、建築構法計画などから所定の単位数の履修を行うことで、免許登録要件として国土交通大臣の定める建築に関する実務のうち、“大学院における実務の経験、1年”もしくは“2年”に該当する要件を満たすことができる。

以上のような多様な修学を通して、より実践的な環境デザイナーを育成する。

【研究指導体制】

環境設計コースを担当する教員が、それぞれ研究室を有し、研究室に所属する学生の指導を行う。研究指導は芸術工学専攻全体に共通する以下のような方法で行われる。

1) 異なるコースと共同での修士研究中間報告

2年間にわたる修士研究の中で、1年次修了時に芸術工学演習の一環として修士研究の中間発表会を開催する。芸術工学府は、デザインの対象に対応した6コースが縦軸となり、横軸としてデザイン科学系統、デザイン工学系統、設計・制作系統、文化・社会デザイン系統の方法論別の系統が配置されていることが特徴である。この中間発表会は、横軸である各系統別に開催される。これによって、例えば環境設計とメディアデザインのように、異なるデザイン対象でありながら、研究方法において同様な専門性を有する教員や学生から幅広い批評を得る機会を設ける。また2年次修了時、修士研究の最終的な評価は、コースごとに行い、質の保証を確実に行うものとする。

2) 複数の教員による修士論文指導

芸術工学府の学生に対しては、上述の中間報告を終えた2年次進級時に、主指導教員とともに、副指導教員を1~2名割り当てる。このときの考え方として、主指導教員とは異なる専門性を有する副指導教員により、専門性の幅を広げる方向性を担保することとする。

なお、副指導教員は、芸術工学府の教員に限定せず、他学府、国内外を問わず他大学からも割り当て可能とする。具体的な割り当ては学生の資質・希望を勘案して主指導教員との協議によって定める。

学生は、2年次の各クォーターに1回以上、副指導教員へ進捗を報告し、指導を受けることとする。この指導は必ずしも対面によらず、オンライン形式も含んだ形も可能とする。学生は指導を受けた記録を残し、主指導教員と共有し、その後の修士研究推進に活用する。2年次修了時、修士研究の最終的な評価は、コースごとに行い、質の保証を確実に行うものとする。

【学位論文審査方針】

修士論文調査委員会を組織して審査を行う。この委員会は主指導教員及び副指導教員をそれぞれ主査、副査とし、その他各「系統」における芸術工学演習の一環として実施される中間発表時の評価者等で構成する。また、学術面のみならずデザインの社会への展開の観点からの評価を受ける趣旨から、学外の企業等でデザイン実践を行う関係者からアドバイスをもらう機会も確保し、必要に応じて調査委員会への参画を進める。

学位論文評価基準として5つの評価項目（1. 研究の課題設定、2. 先行研究の理解と提示、3. 研究方法の妥当性、4. 論証方法や結論の妥当性と意義、5. 論文の形式・体裁）を、修士作品評価基準として5つの評価項目（1. 作品の課題設定、2. 先行作品・先行研究の理解と活用、3. 作品の制作方法と技術力、4. 作品の表現力と意義、5. 作品説明書の形式・体裁）を設け、修士論文及び修士作品の審査の際に、審査委員がそれぞれの観点から評価し、最終試験の可否を判定する。

【継続的なカリキュラム見直しの仕組み(内部質保証)】

到達目標の達成度は、以下の方針（アセスメント・プラン）に基づいて評価し、その結果に基づいて、授業科目内の教授方法や授業科目の配置等の改善の必要性がないかを環境設計コース会議の下に設置する教育改善WGにおいて検討する。その検討内容は環境設計コース会議にフィードバックされる。

【アセスメント・プラン】

- ・「発展」期の評価：学びの集大成である修士研究を対象とし、1年次修了時に芸術工学演習の一環として行われる修士研究の中間発表会で進捗の確認を行う。
- ・「統合」期の評価：修士研究について、主査・副査による審査と合わせて内容を適切な方法で発表したうえで、総合的に審査する。

3) アドミッション・ポリシー

求める学生像

九州大学では、九州大学教育憲章の理念と目的を達成するために、高等学校等における基礎的教科・科目の普遍的履修を基盤とし、大学における総合的な教養教育や専門基礎教育を受け、自ら学ぶ姿勢を身に付け、さらに進んで自ら問いを立て、創造的・批判的に吟味・検討し、他者と協働し、幅広い視野で問題解決にあたる力を持つアクティブ・ラーナーへと成長する学生を求めている。

芸術工学専攻修士課程では、九州大学が求める学生像を踏まえ、本学府の理念である「技術の人間化」に基づき、技術を人間生活に適切に利用するための道筋を設計でき、指導的立場を果たし得る「高次のデザイナー」の養成を目的としており、本専攻での就学を目指す学生には次のことが求められている。

- ・芸術工学に関連する高度な専門知識を修得し、社会の課題を発見・提起でき、かつ解決・実践する力を修得するために、人文、社会、自然にまたがる知識、論理的な思考能力、芸術的感性を有する。
- ・広い視野に立って異なる専門領域や価値観・文化が異なる者と協力・連携しながら課題解決へ向かう力を修得するために必要な、国際性、多様性に対する好奇心・配慮、豊かな寛容性と柔軟性を有する。
- ・自らの強み、経験、専門的知識を有効的に活用し、新しいデザイン領域を開拓・先導するために必要な自己・社会分析力、柔軟な思考力・対応力、創造的意欲、行動力を有する。

これらに加えて、環境設計コースでは、以下のような学生を求めている。

1. 多様化する環境に関する諸問題に対して、空間の広がりや、歴史性をふまえて、問題を解決するためにどのような提案をすべきか、自ら判断する強い意欲を有する。
2. 建築、都市、地域、ランドスケープ等に関する高度な専門知識を修得するために必要な基礎的な専門知識と学力を有する。
3. 環境を読み解く力、社会調査スキル、科学的思考力、表現能力、分析する力を修得するために必要な環境や事物を専門的に観察する能力、創造的な感性を有する。

グローバル・アーキテクト・プログラムの履修要件は、次の通りである。

- ・九州大学芸術工学部環境設計学科もしくは芸術工学科環境設計コースを卒業、又は他大学の建築系学科を卒業し環境設計学科もしくは芸術工学科環境設計コースの教育学習目標を達成していると認められた者、かつ
- ・大学院芸術工学府芸術工学専攻修士課程に在学し、芸術工学府長が許可した者

入学者選抜方法との関係

修士課程では、自己推薦入試及び一般入試を実施する。

自己推薦入試は、提出書類（研究計画書・業績概要書・自己推薦書・成績証明書・外部英語試験スコア）と面接（プレゼンテーション・質疑応答・口頭試問）の成績を総合して判定する。

一般入試は、英語（外部英語試験スコア）、専門科目及び面接（プレゼンテーション・口頭試問）の成績を総合して判定する。

芸術工学府芸術工学専攻 環境設計コース カリキュラムマップ

科目区分

凡例 科目区分

(再掲は薄色表示)

(再掲は薄色表示)

修士研究関連科目	スタジオプロジェクト科目	環境設計コースコア科目	展開科目
修士研究関連科目	スタジオプロジェクト科目	環境設計コースコア科目	展開科目

学修目標			M1				M2			
区分	領域	修士課程	1Q	2Q	3Q	4Q	1Q	2Q	3Q	4Q
実践		D-3. 大学・研究所・博物館等の研究職、建築・造園・都市計画・文化振興・環境政策等の行政職、まちづくり・むらおこし等のプランナー、遺産保護・遺産修復等のマネージャー、建築・造園・景観等のデザイナー、建築・造園等のエンジニア等の幅広い職種において、よりよい環境を創造する環境デザイナーとして活躍しようとする事ができる。	芸術工学特別研究Ⅰ		芸術工学特別研究Ⅱ		芸術工学特別研究Ⅲ		芸術工学特別研究Ⅳ	
			インターンシップⅠ	インターンシップⅡ						
			ストラテジックアーキテクトプロジェクトA ランドスケープデザインプロジェクト インターンシップⅢ		ストラテジックアーキテクトプロジェクトB		ストラテジックアーキテクトプロジェクトA ランドスケープデザインプロジェクト インターンシップⅢ		ストラテジックアーキテクトプロジェクトB	
			アーキテクトインターンシップⅠ				アーキテクトインターンシップⅡ 建築インターンシップ			
			芸術工学特別プロジェクトⅠ～ⅦⅧ				芸術工学特別プロジェクトⅠ～ⅦⅧ			
実践		D-2. 環境を評価・保全・活用し、未来へ手渡す環境の価値を技術によって向上させ、創生する営みとしての高次のデザイン活動が社会に及ぼす影響を常に考慮しながら、社会に対する責任と倫理観を持って環境デザインに取り組むことができる。	環境デザインプロジェクトA		環境デザインプロジェクトB		環境デザインプロジェクトA		環境デザインプロジェクトB	
							グローバル・アーキテクト・プロジェクト			
			スタジオプロジェクトⅠ-A スタジオプロジェクトⅠ-B	スタジオプロジェクトⅡ-A スタジオプロジェクトⅡ-B	スタジオプロジェクトⅢ-A スタジオプロジェクトⅢ-B	スタジオプロジェクトⅣ-A スタジオプロジェクトⅣ-B	スタジオプロジェクトⅠ-A スタジオプロジェクトⅠ-B	スタジオプロジェクトⅡ-A スタジオプロジェクトⅡ-B	スタジオプロジェクトⅢ-A スタジオプロジェクトⅢ-B	スタジオプロジェクトⅣ-A スタジオプロジェクトⅣ-B
					芸術工学演習					
			芸術工学特別プロジェクトⅠ～ⅦⅧ				芸術工学特別プロジェクトⅠ～ⅦⅧ			
適用・分析		C-2-2. 「環境」の現状や課題を示す個々の要素の分析から得られた情報を統合し、本質的価値の評価に基づき、生態的・空間的に調和した、過去・現在、将来という時間的な視野から持続可能な環境デザインの計画・設計・提案を行うことができる。	ストラテジックアーキテクトプロジェクトA ランドスケープデザインプロジェクト		ストラテジックアーキテクトプロジェクトB		ストラテジックアーキテクトプロジェクトA ランドスケープデザインプロジェクト		ストラテジックアーキテクトプロジェクトB	
			環境デザインプロジェクトA		環境デザインプロジェクトB		環境デザインプロジェクトA		環境デザインプロジェクトB	
							グローバル・アーキテクト・プロジェクト			
			スタジオプロジェクトⅠ-A スタジオプロジェクトⅠ-B	スタジオプロジェクトⅡ-A スタジオプロジェクトⅡ-B	スタジオプロジェクトⅢ-A スタジオプロジェクトⅢ-B	スタジオプロジェクトⅣ-A スタジオプロジェクトⅣ-B	スタジオプロジェクトⅠ-A スタジオプロジェクトⅠ-B	スタジオプロジェクトⅡ-A スタジオプロジェクトⅡ-B	スタジオプロジェクトⅢ-A スタジオプロジェクトⅢ-B	スタジオプロジェクトⅣ-A スタジオプロジェクトⅣ-B
			芸術工学特別プロジェクトⅠ～ⅦⅧ				芸術工学特別プロジェクトⅠ～ⅦⅧ			
適用・分析		C-2-1. 異分野との協働を通して、専門知識を総合的に活用しながら、社会の複合的な課題を提起し、解決のための実践的な方向性を示すことができる。	スタジオプロジェクトⅠ-A スタジオプロジェクトⅠ-B	スタジオプロジェクトⅡ-A スタジオプロジェクトⅡ-B	スタジオプロジェクトⅢ-A スタジオプロジェクトⅢ-B	スタジオプロジェクトⅣ-A スタジオプロジェクトⅣ-B	スタジオプロジェクトⅠ-A スタジオプロジェクトⅠ-B	スタジオプロジェクトⅡ-A スタジオプロジェクトⅡ-B	スタジオプロジェクトⅢ-A スタジオプロジェクトⅢ-B	スタジオプロジェクトⅣ-A スタジオプロジェクトⅣ-B
			ストラテジックアーキテクトプロジェクトA ランドスケープデザインプロジェクト		ストラテジックアーキテクトプロジェクトB		ストラテジックアーキテクトプロジェクトA ランドスケープデザインプロジェクト		ストラテジックアーキテクトプロジェクトB	
			環境デザインプロジェクトA		環境デザインプロジェクトB		環境デザインプロジェクトA		環境デザインプロジェクトB	
			スタジオプロジェクトⅠ-A スタジオプロジェクトⅠ-B	スタジオプロジェクトⅡ-A スタジオプロジェクトⅡ-B	スタジオプロジェクトⅢ-A スタジオプロジェクトⅢ-B	スタジオプロジェクトⅣ-A スタジオプロジェクトⅣ-B	スタジオプロジェクトⅠ-A スタジオプロジェクトⅠ-B	スタジオプロジェクトⅡ-A スタジオプロジェクトⅡ-B	スタジオプロジェクトⅢ-A スタジオプロジェクトⅢ-B	スタジオプロジェクトⅣ-A スタジオプロジェクトⅣ-B
			芸術工学特別プロジェクトⅠ～ⅦⅧ				芸術工学特別プロジェクトⅠ～ⅦⅧ			
知識・理解	デザイン科学/デザイン工学システム	B-4. 人間と環境の関係をふまえたサステナブル・デザインを可能とする安全性・健康性・機能性・快適性を実現する技術に関する知識を理解し、その理論や概念を説明することができる。	環境化学特論		環境化学特論		環境化学特論		環境化学特論	
			熱環境学特論		熱環境学特論		熱環境学特論		熱環境学特論	
			建築構造学特論		建築構造学特論		建築構造学特論		建築構造学特論	
			環境心理学特論		環境心理学特論		環境心理学特論		環境心理学特論	
			音環境評価特論		音環境学特論		音環境評価特論		音環境学特論	
知識・理解	設計・制作システム	B-3. 環境の価値を評価・保護・継承するための専門性と地域環境の価値となるべき建築・景観・社会システムのデザインに関する知識を理解し、その理論や概念を説明することができる。	建築計画特論	建築構法計画特論			建築計画特論	建築構法計画特論		
			景観生態学特論	ランドスケープデザイン特論		環境保全学特論	景観生態学特論	ランドスケープデザイン特論		環境保全学特論
			共生社会デザイン論		環境リスクマネジメント		デザイン哲学		美術史	
			環境人類学特論		環境人類学特論		環境人類学特論		環境人類学特論	
			国際環境政策特論		国際環境政策特論		国際環境政策特論		国際環境政策特論	
知識・理解	文化・社会デザインシステム	B-2. 環境を構成する自然と文化の持続性・多様性等の価値評価に関連する知識を理解し、その理論や概念を説明することができる。	環境文化特論		環境文化特論		環境文化特論		環境文化特論	
			国際環境政策特論		国際環境政策特論		国際環境政策特論		国際環境政策特論	
			文化財学特論		文化財学特論		文化財学特論		文化財学特論	
			日本建築史特論		西洋建築史特論		日本建築史特論		西洋建築史特論	
			芸術工学演習				芸術工学演習			
主体的な学び・協働	設計・制作/文化・社会デザインシステム	A-2. 多様な知の交流を行い、チームの一員として他者と協働し、自らの専門性を発揮しながら問題解決にあたることできる。また論理的な文章表現力、口頭発表能力、及び討議力を持って、効果的に情報を発信し、吸収することができる。	ストラテジックアーキテクトプロジェクトA ランドスケープデザインプロジェクト		ストラテジックアーキテクトプロジェクトB		ストラテジックアーキテクトプロジェクトA ランドスケープデザインプロジェクト		ストラテジックアーキテクトプロジェクトB	
			環境デザインプロジェクトA		環境デザインプロジェクトB		環境デザインプロジェクトA		環境デザインプロジェクトB	
							グローバル・アーキテクト・プロジェクト			
			建築計画特論	建築構法計画特論			建築計画特論	建築構法計画特論		
			景観生態学特論	ランドスケープデザイン特論		環境保全学特論	景観生態学特論	ランドスケープデザイン特論		環境保全学特論
主体的な学び・協働	設計・制作/文化・社会デザインシステム	A-1. 多様化する諸問題に対してデザインに関わる深い専門的知識を背景とし、自ら問題を見出し、創造的・批判的に吟味・検討しながら、幅広い分野の課題に実践的に取り組みることができる能力を有する。また、そのために自主的・継続的に学習を進めることができる。	共生社会デザイン論	環境リスクマネジメント	デザイン哲学	美術史	共生社会デザイン論	環境リスクマネジメント	デザイン哲学	美術史
			環境人類学特論		環境人類学特論		環境人類学特論		環境人類学特論	
			国際環境政策特論		国際環境政策特論		国際環境政策特論		国際環境政策特論	
			文化財学特論		文化財学特論		文化財学特論		文化財学特論	
			日本建築史特論		西洋建築史特論		日本建築史特論		西洋建築史特論	
区分	領域	修士課程	1Q	2Q	3Q	4Q	1Q	2Q	3Q	4Q
学修目標			M1				M2			
アセスメント・プラン			履修科目の成績・単位認定に基づいて行う。				「発展」期の評価：学びの集大成である修士研究を対象とし、1年次修了時に芸術工学演習の一環として行われる修士研究の中間発表会で進捗の確認を行う。			
							履修科目の成績・単位認定および、修士論文結果に基づいて行う。			
							「統合」期の評価：修士研究について、主査・副査による審査と合わせて内容を適切な方法で発表し、総論的に審査する。			